

館長からのメッセージ



図書館長
飯島 昇藏

QUAE SIT SAPIENTIA DISCE LEGENDO

QUAE SIT SAPIENTIA DISCE LEGENDO (知恵の何たるかを読むことによって学べ)。図書館の入り口に彫られているローマの政治家、軍人、著述家、大カトーの言葉である。

大カトーの言葉は人生の目的とそれを達成するための手段を述べたものである。しかし、何を読めばよいのか、そしてそれをいかに読むべきかについては語っていない。もちろん、書かれた言葉、つまり文字(の連続)を読むのである。大カトーの箴言も文字がなかったならば時空を超えて今此処にいるわれわれには伝わらなかったであろう。

さて「知恵とは何であるか」を学ぶためには、若者は図書館で、無数の書物の中からどの書物を選び、それをどのような方法で読めばよいのか？政治学者レオ・シュトラウスは”What Is Liberal Education?”という有名な論文の中で、liberal educationとは「最も偉大な精神たちが後世に遺した偉大な書物たちをしかるべき注意を払って研究すること」であると規定し、その研究においては「より多くの経験を積んだ生徒たち」＝「教師たち」が「初心者たちを含めてより少ない経験しか積んでいない生徒たちを補佐する」のであると述べている。

その場合に、「知恵」とliberal educationとはいかなる関係にあるのか？レオ・シュトラウスによれば、完璧な紳士であることperfect gentlemanship、人間の卓越性へ向けての教育としてのliberal educationは、人間の卓越性、人間の偉大さを自分自身に思い起こさせることにその本質がある。それではliberal educationはいかなる道によって、またいかなる手段によってわれわれに人間の偉大さを思い起こさせるのか？シュトラウスはプラトンの次のような示唆に耳を傾ける。すなわち、最高の意味における教育とは哲学である。哲学とは知恵の探究、換言すれば、最も重要な事柄、最高の事柄あるいは最も包括的な事柄に関する知識の探究である。プラトンが示唆した知識とは徳であり幸福である。しかし人間は知恵に到達することはできないので、徳や幸福は常に完璧ではありえない。それにもかかわらず、(哲人王が支配する最善の国家というプラトンの政治哲学が示唆しているように)哲学者は自らが無条件的には知恵があるわけではないのに、ただ一人真なる王kingであると宣言されている。すなわち、人間の精神が達成しうる最高度の卓越性すべてをかれは保持していると宣言されている。ここからシュトラウスは、われわれは哲学者であることはできない、われわれは最高の形の教育を手にはできないという結論を導かざるをえないと述べる。けだし哲人王の政治は「本」の中にしか存在しえないからであろう。

しかしシュトラウスはさらに続ける。われわれは哲学者であることはできないが、哲学を愛することはできる。われわれは哲学することを試みることはできる。このように哲学することの本質は、「偉大な哲学者たちの間の、あるいはもっと一般的かつもっと用心深くいえば、最も偉大な精神たちの間の会話に傾聴することに存するのであり、そしてそれゆえに、偉大な書物たちを研究することに存するのである」。

未曾有の巨大地震と巨大津波の自然災害、さらにレヴェル7の原子力発電所事故という人災に見舞われて、日本のみならず世界中がパニックに陥っているかのようなのである。さまざまな雑音に惑わされずに、「知恵の何たるかを読むことによって学ぶ」べく、今日も多くの若者が図書館で書物をひもといている。その読書が明日の自分自身のために、母国あるいは父祖の地のために、世界のために、必ず役立つと信じて。若者たちと世界の最も偉大な精神たちとの沈黙の会話を補佐すべく、図書館は永遠に「大学の心臓」であり続けなければならない。

参考文献：Leo Strauss, *Liberalism Ancient and Modern*, The University of Chicago Press, 1995. 石崎嘉彦ほか訳「リベラリズム 古代と近代」、ナカニシヤ出版、2006年。